

第3 地球環境の保全

人類の歴史から見ればわずかの時間にすぎない20世紀に、先進国といわれる国々を中心として、科学技術を飛躍的に発展させ、今日の目覚ましい繁栄を築いてきました。

反面、こうした人間の活動は、資源やエネルギーの大量使用に依存する社会をつくり、その結果、大気・水質に係る汚濁物質や化学物質、温室効果ガスなどが排出され、環境に対し負荷を与えています。

地域における大気汚染や河川・湖沼の水質汚濁、さらに化学物質による環境汚染などは、地域の自然が本来もっている復元力を超える負荷が原因となって発生しているものですが、その被害や影響は狭い地域にとどまらず、地球規模にまで広がり、①地球の温暖化、②オゾン層の破壊、③酸性雨、④森林（特に熱帯林）の減少、⑤砂漠化、⑥生物の多様性の減少、⑦海洋環境の劣化など、いわゆる地球環境問題を引き起こすことが指摘されています。

地球環境問題は国際問題でもあることから、国が中心となって取り組むべき課題ですが、その解決のためには、まず、私たちの生活する地域社会が、大気・水・土壌・生物といった環境の側面から見て健全な関係を保つことが必要です。

環境施策の原点は、環境への負荷が重大なあるいは取り返しのつかない影響を及ぼすことのないよう、先見性をもって取り組むことが必要であり、私たちは、身の回りの環境も地球環境の一部であることを認識し、地域でできることを地域自らが積極的に取り組んでいくことが重要です。

3-1 水環境など生活環境の保全

生物の生存に欠かすことのできない地球上の水は、基本的に「降水→土壌水→地下水→地表水（河川・湖沼）→海洋→蒸発→雲→降水」という循環系を形成しています。

近年、都市部への人口集中に伴う都市域の拡大や農林業をめぐる厳しい経営環境等を背景に、都市域での雨水の不浸透区域の拡大、河川改修、森林・水田等の荒廃や減少などが進んでいます。このため、降雨が土壌に保水されながら地下水となって徐々に流下していくという、本来あるべき健全な水循環が損なわれ、湧水の枯渇や生物の生息環境の悪化など、さまざまな障害を招いており、とりわけ閉鎖性水域^{※1}や都市中小河川の水質の改善が進みにくい状況にあります。

また、大気環境については、光化学オキシダントが環境基準^{※2}を超えているものの、概ね良好な状態にあります。

※1 閉鎖性水域：湖や港など、その形状から見て、水の循環が悪い水域のことを言い、水質の悪化をきたしやすい。

※2 環境基準：人の健康を保護し、及び生活環境を保全する上で維持することが望ましい基準として、大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音について定められている。

閉鎖性水域や中小河川の水質

海域や河川の水質が概ね良好な状態で推移しているの比べ、湖沼は富栄養化による水質汚濁が著しい状況にあります。

このため、工場排水規制や下水道等の整備による生活排水対策、側条施肥田植機^{*1}や緩効性肥料^{*2}・被覆肥料^{*3}を利用した農業排水対策、底泥のしゅんせつなどの直接対策等を進めてきました。

しかしながら、流入負荷^{*4}割合の高い農地や山林等の面源^{*5}に対する削減対策が難しいこともあって(図3-3-1)、三方五湖等の水質は依然として改善を見ていません(図3-3-2)。

また、狐川(福井市)や磯辺川(丸岡町～春江町)、鞍谷川(今立町～鯖江市)などの中小河川では、水質が改善しつつあるものの、清浄な河川との間には依然として大きな開きがあります。

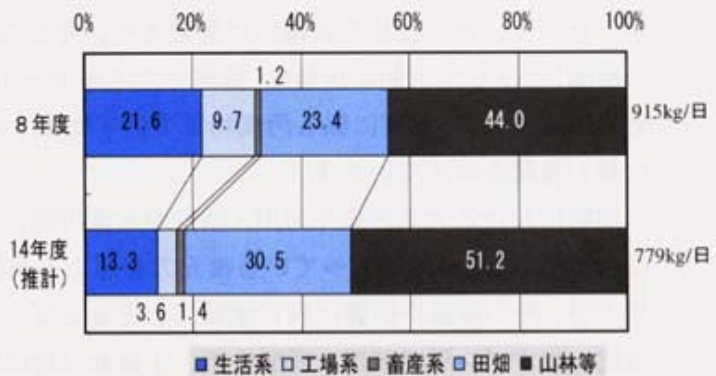


図3-3-1 三方五湖の流入汚濁負荷の割合(COD)

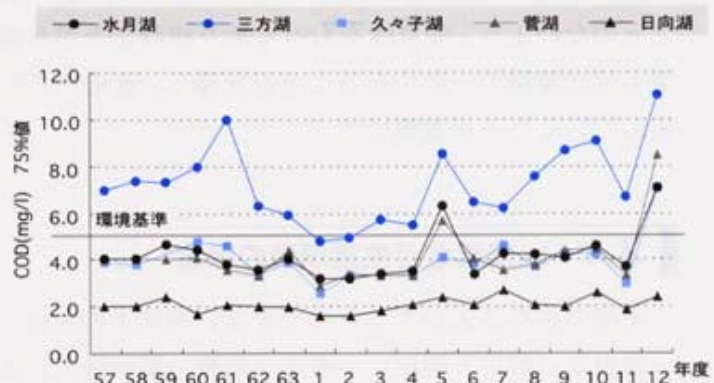


図3-3-2 三方五湖の水質の経年変化(COD)

*1 側条施肥田植：肥料を施さずに代かきした後に、機械で田植えしていく際に、苗のすぐそばに肥料を施していく方法
 *2 緩効性肥料：肥料成分がゆっくりと溶出・分解してくるので、根やけが起こりにくかつ肥効が持続する特徴があり、環境負荷の削減の上からも、有効と考えられている。
 *3 被覆肥料：肥料の表面を微細な穴のあいた薄い膜等で被覆した肥料。被覆材の材質や厚さの違いで肥料成分の溶出量や溶出期間を調節することができ、環境負荷の低減にも有効と考えられている。
 *4 流入負荷：湖沼などに流れこむ窒素や燐などの環境負荷のこと。
 *5 面源：工場排水や生活排水は排水口から排出されるので「点源」と呼ばれるのに対して、降雨に伴って面的に流出する農業系や山林系の負荷のことを「面源」と呼ぶ。